

松 山 大 学 論 集
第 24 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 1 2 年 8 月 発 行

貨幣流通の視点からみた山西票号

李 紅 梅

研究ノート

貨幣流通の視点からみた山西票号

李 紅 梅

はじめに

山西票号については、20世紀初期から研究が始まり¹⁾、孔祥毅²⁾、黄鑒暉³⁾、張国輝⁴⁾らに代表される研究者たちにより80年代から大量の業績⁵⁾が積み上げられ、史料集⁶⁾等の有益な資料が出版された。その中で主に山西票号の起源・変

-
- 1) 中国に衛聚賢著『山西票号』（初版1936年）经济管理出版社、2008年）、陳其田著『山西票号考略』（商務印書館、1937年）など；日本に西山栄久「山西の為替業者たる票号の起原とその変遷」（『東亜経済研究』（十一～一）1927年）、鈴木総一郎『支那における金融の特殊性』（千倉書房、1941年）、香山峻一郎『錢莊資本論』（実業之日本社、1948年）、加藤繁『支那経済史考証』（東洋文庫、1953年）、佐伯富「清朝の興起と山西商人」（『社会文化史学』（第一輯）、社会文化史学会、1966年）などが挙げられる。
 - 2) 孔祥毅『金融票号史論』（中国金融出版社、2003年、1979年から2002年まで発表した山西票号についての論文を所収）、孔祥毅・王森主編『山西票号研究』（中国财政经济出版社、2002年）等が挙げられる。
 - 3) 黄鑒暉著『山西票号史』（2002年第一版）山西经济出版社、2008年。
 - 4) 張国輝「清代前期の錢莊和票号」『中国经济史研究』1987年第4期、『晚清錢莊和票号研究』中華書局、1989年。
 - 5) 陳捷「山西商人と票莊について」（新潟大学『現代社会文化研究』1、1994年）、中村哲夫「近代中国の通貨体制の改革——中国通商銀行の創業——」（社会経済史学会『社会経済史学』62巻3号、1996年）、張正明・鄧泉（『平遥票号商』山西教育出版社、1997年）、張惠信「清末貨幣變革對山西票號的影響」（『財政與近代歷史論文集』中央研究院近代研究所、1999年）、木村亜子「清代咸豐期における山西票号について」（奈良女子大学人間文化研究科『人間文化研究科年報』19、2003年）、蕭文嫻「清末上海金融市場の形成における伝統金融機関山西票号の役割」（『経済史研究』(9)、2005年）、劉建生「山西票号業務総量之估計」（『山西大学学报（哲学社会科学版）』第30巻第3期、2007年）、燕紅忠「山西票号資本与利潤總量之估計」（『山西大学学报（哲学社会科学版）』第30巻第6期、2007年）等が挙げられる。

遷、民間金融機関として果たした役割、山西商人の商業活動との関係、山西票号と清政府との関係など、様々な視角から検討されてきた。金融史の視角からは票号が中国式の銀行として認識されている研究がある一方、並立した錢莊が金融機関として清代末期に外国銀行との提携で新式銀行に転換したのに対して、票号が「清亡、票号亦亡」（清王朝の衰退、滅亡にともない、票号も滅亡）という言葉通りに、民国以降に大半なくなったという議論がいまも続いている。

ただし、山西票号の創設についてはほぼ理解は一致している。すなわち、平遥出身で染料業を営んでいた雷履泰は道光3（1823）年に日昇昌票号を創立し、為替手形の送金業務を始めた。票号が誕生した19世紀20年代から20世紀30年代まで発展、繁栄、衰退を経過してきた一世紀は清王朝の繁栄から衰退・滅亡に至った時期でもある。清代の貨幣史の角度からみれば、大量の銀が海外との貿易で流入から流出に転換した時期であり、そして制錢も乾隆期の大量鑄造・供給から、原料銅の枯渇に転じていた時期でもある。近代中国農業や物価について研究蓄積を残している林満紅⁷⁾は清代の農業を世界経済の枠で銀の産出量と時期をリンクして検討したが、その手法は非常に有益であると思われる。本稿は貨幣流通の視点から先行研究を踏まえながら、計量手法で山西票号について新たな解釈を試みることを目的としている。

山西票号についてはここで関心を持った点が二つある。一つは清代山西省における貨幣流通の実態について明らかにしたい点である。これまで、福建・北京・徽州・巴県（四川）を地域別に検討し、銀両・銅錢の使用実態の特徴を説明してきた⁸⁾。清代において山西省が商業活動を活発化させた地域として、特に銀両の為替送金が大量に行われた中で銀両・銅錢の行使状況を確認したい。も

6) 中国人民銀行山西省分行・山西財経学院編『山西票号史料』山西経済出版社、1990年。
中国人民銀行山西省分行・山西財経学院《山西票号史料》編写組、黄鑒暉編『山西票号史料』山西経済出版社、2002年。濱下武志・李焯然・林正子・張士陽編『山西票号資料 書簡篇（一）』（東洋学文献センター叢刊第60輯）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1990年。

7) 林満紅「世界経済与近代中国農業——清人汪輝祖一段乾隆糧価記述之解析」中央研究院近代史研究所編『近代中国農村経済史論文集』1989年。

う一つは、山西商人が創設した票号を通じて清代中後期に銀両が不足する中で円滑的に送金業務が行われ、経済全体に対して関わった送金額の割合を推計したい。その作業を通じて貨幣流通の視点から票号が清代中期から末期までの間に果たした役割を検討する。

第1節 山西票号に関する研究

1. 清代の民間金融機関

錢莊の由来は唐・宋の時代に遡れる。唐の時代に「金銀鋪」・「兌房」と呼ばれる両替商が成立し、金・銀細工などの製造販売から金銀の鑑定や保管までに業務を拡大し、両替・預金業務も行うようになった。宋代に銅錢・銀錠・交子の両替業務を行った。明代嘉靖～万暦年間（1522～1619年）、銀錠の流通が広く行われ、銀錠と銅錢の交換を専門に行う両替商も出現するようになった。その時は「兌錢鋪」⁹⁾「錢卓」¹⁰⁾と呼ばれた。実際、錢莊の起源についての見解は現段階ではまだ統一されていない。彭信威は明代の小説『金瓶梅』における錢鋪での銀両と銅錢を交換する描写を根拠として、錢莊が明代万暦年間に存在したと判断している¹¹⁾張国輝は明代の文献と小説からみると、錢莊が清代以前に既に存在したと認識している¹²⁾葉世昌は明代に錢鋪が錢莊より早く出現したが、官撰文献に錢莊が生まれた後も、錢鋪と錢莊という言葉を同時使用した点から、錢鋪と錢莊を区別しなければならないと分析し、錢莊が乾隆初年に

8) 拙稿「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として——」（『松山大学論集』第18巻第3号、2006年8月号）、「清代中期四川巴県における貨幣流通——『巴県档案』を史料として——」（『松山大学論集』第22巻第4号、2010年）、「清代安徽省における貨幣流通——徽州文書を中心として——」（『松山大学論集』第23巻第2号、2011年）で考察してきた。

9) 『明熹宗実録』、卷七十六、天啓六年九月丁丑、黄鑒暉著『山西票号史』（1990年）1頁から引用。

10) 『崇禎長編』、卷一、崇禎十六年十一月己酉「…其京城内外、所有錢桌、錢市、著厂衛五城衛門嚴行禁緝…」『山西票号史料』（1990年）、6頁から引用。

11) 彭信威『中国貨幣史』、上海人民出版社、1965年、515～16頁。

12) 張国輝『晚清錢莊和票号研究』、1頁。

あったと強調している¹³⁾

清朝政府は明代の貨幣制度を継承し、銀両を大額に、制錢を小額に用いた。そのために、銀両と制錢を兌換する需要が多くなってきた。乾隆年間から京師以外の江蘇・福建・四川・湖北・広東で錢莊の名称が用いられるようになったが、業務は手数料を得ながら、本位通貨とした銀錠と日常に使用された銅錢の両替を行う段階に止まった。張国輝は広西では塩・米を販売する店で兼ねて兌換したことからみると、18世紀中葉ごろ錢莊の業務内容と活動範囲が狭くて、貨幣経営の最原始的な形式であったと指摘している¹⁴⁾ 康熙年間(1661～1772年)から1830年の北京では錢舖が389軒あり、上海では1786～1797年に錢莊が124軒あったと推計されている。実際、銀1両に相当する千枚の銅錢の重さはおよそ4キログラムで、50両の銀両を詰める箱の重さは、110キログラムとなり、二人でなければ持ち上げることはできない¹⁵⁾ 信用がある錢莊は現金の預金や払い出し業務まで拡大するとともに重い銀両と銅錢が携帯不便のため、発行した預かり書や書付けを発行した。それが錢票と呼ばれ、その信頼を受けてそのまま市場に受容され、使用できるようになった。少なくともその時期に、京師、江蘇、山西省において錢票を使用したとみられている。道光16(1836)年に政府は吉林錢票の問題で全国の高級官僚との間で錢票の使用と廃除について議論した。錢票の廃止を主張する官僚の意見は錢票の使用による銀高が原因であるが、錢票の使用に賛成する官僚は、山西に錢票の使用が活発で、直隸、河南、山東にも大量に使用されたので、厳しく管理すべきと主張した¹⁶⁾ 山東巡撫額補は「西北諸省の陸地が多くて水路が少ないため、商人と庶民が交易の際銀両を十分に使用できず、銅錢が10千文以上になると、馬や車

13) 葉世昌「從錢舖到錢莊的產生」『学述月刊』1990年05期。

14) 張国輝『晚清錢莊和票号研究』3頁。

15) ロイド・E. イーストマン著、上田信・深尾葉子訳『中国の社会』、平凡社、1994年、151頁。

16) 中国人民銀行総行参事室金融史料組編『中国近代貨幣史資料』(第一輯)、中華書局、1964年、122～142頁。

で乗せることになる。銭票が携帯の便利さを持ち、運ぶ悩みがないので、……民に極めて便利である」と報告していた¹⁷⁾。それで、銭票が道光年間に普及していったと判断されている。「19世紀前半には、流通している通貨の三分の一以上は紙幣の形態をとっていた」と見込んでいる¹⁸⁾。しかし、現段階では史料の限界により銭票の具体的なデータで分析する研究がまだないと言えるであろう。

銀号についての考察が少ないが、葉世昌は銭荘と同じような機能を持つ金融機関であり、ただ名称の呼び方が違っていただけと指摘し、『中国貨幣史』を引用して、乾隆23(1758)年以前に存在していたと考察した¹⁹⁾。両替、貸金、為替の業務を取り扱う金融機関として地域によって、長江流域と福建で「銭荘」、天津などの華北で「銀号」、北方で「票号」、上海・漢口で「匯劃銭荘」、広州とその周辺で「銀号・銭荘」と呼ばれている²⁰⁾。前述したように、銀号と銭荘の変遷が同じであっても、銀両、金・銀細工を経営する銀炉²¹⁾(すなわち、炉房)と呼ばれた店舗から発展してきた点に留意したい。そして、銀号も銭票のような「銀票」という紙幣も銭票のように発行した。附表3を参照して分かるように票号も銀両を準備金として銀票と銀元票を発行した。

黄鑒暉は「帳局」²²⁾と呼ばれた金融機関について考察してきた。票号の創立より早かった乾隆元(1736)年に山西出身の商人は「祥發永」という帳局を資本金4万両で張家口で開設した。それは主に地域内(県・鎮・村を指す)で店

17) 同前, 131頁。「西北諸省陸路多而水路少, 商民交易, 勢不能尽用銀兩; 現錢至十千以上, 即須馬駝車載, 自不若錢票有取携之便, 無盤運之煩, …甚便於民。」

18) 同15, 152頁。しかし、その推計の根拠を示していない。戴建兵著『中国銭票』(中華書局, 2001年)に郝延平(『中国近代商業革命』, 79頁, 上海人民出版社, 1991年)の分析を引用した。郝延平は「そのような状況で銭票は貨幣制度に補充的な役割を果たし、その流通量は貨幣流通総量の3分の1を占めていた」と認識している。

19) 同13。

20) 陳玉雄「「銭荘」の発展と衰退——「中国式銀行」の衰退要因に関する試論——」(『中国のインフォーマル金融と市場化』麗澤大学出版会, 2010年に所収), 表1を参照。ただ、票号も広義的な「銭荘」として考察した点に注意する必要がある。

21) 『山西票号史料』山西経済出版社(1990年), 6頁。

22) 黄鑒暉「清代帳局初探」『歴史研究』1987年第4期。

舗・商売を経営する商人に預金・貸付金を中心に行う信用機構である。設立してから繁栄した1852年までの発展時期に北京に268軒あり、各資本金は1,000万両以上であった。そのうち山西商人が210軒開設した。京師で少量の銀両票を発行した以外に、支店を設けなかったため、地域間の匯兌業務が行われなかった。1853～1899年は再発展から衰弱までの時期であり、支店が増設されたが、拡大の勢いは票号より比べられないほど弱かった。そのため、清代の官撰史料に「帳局」の記録が少なくなかった。1900～1915年は倒産の時期であり、1910年の統計によると、北京で最初に設立した「帳局」の軒数は52軒しかなかった。乾隆初期から清末期まで帳局は金融機関として稼動してきたが、その影響を広く及ぼすことができなかつたと言えるであろう。

票号は票莊、匯兌莊とも呼ばれている。匯兌は唐の時代に飛銭・便銭と呼ばれる送金手形制度で初めて使用され、宋代以降紙幣の流通により、衰退してきた。明代後期に銀が主要貨幣になり、匯兌がまた復興してきた。清代に、匯兌を経営する機構は主に銭莊、銀号、典当舗、商店が関わってきたが、道光期に票号が創設された。山西人が開設した場合が多いことから「山西票号」ともいう。

典当（質屋）は高利の貸付業者として、銭莊・票号の金融機関と違う意味を持っていた。つまり、預金利子として、票号の5～8%に対して、銭莊は12%であったが、質屋は36%であった²³⁾しかし、15～18世紀の中国の資金市場を考察する際、質屋を含める必要があると強調する劉秋根²⁴⁾は銭票発行者が銭舗（銀号）だけではなく、典当業や他の店舗も含んでいると指摘した。すなわち、小説を利用しながら銭舗・銭莊・銀号を検討した結果、明代中期に銭舗・銭莊・銀号は主に銀両と銭文を交換するためにはじまり、清代初期その資本が高利息貸出に転化し、その後預金・貸付・銭票の発行・為替などの業務まで拡

23) 同15, 150頁。

24) 劉秋根「15～18世紀中国資金市場發育水平蠡測」『人文雜誌』2008年第1期、劉秋根・柴英昆「明清的銭舗、銭莊与銀号——以白話小説記載为中心」『石家庄学院学报』第12卷第2期。

大したと主張している。そして、錢票を発行した時期についても葉世昌、張国輝、王業鍵が認識している道光時期からではなく、乾隆年間であったと論議している。

清政府は管理機関として財政上の銀両体制と制錢鑄造の重視に力を入れたが、民間市場に需要される貨幣と金融に関する政策を出さなかった。そのため、商人たちは銅錢と銀両という二種の貨幣をいかに運営すれば、利益が生まれるかよく考えていた。そして、市場のニーズと受容に応じて、それぞれの金融機関の機能を果たしていたと思われる。

2. 票号の発展から衰退まで

道光3（1823）年に日昇昌票号を創立した後、道光6（1826）年に絹織物を経営する店は蔚豊厚、天成亨、蔚盛長、新泰厚連盟票号を設立し、道光17（1837）年に茶業を経営する店は合盛元票号を設立した。それで、祁県、平遥、太谷三つの県を中心とした票号グループ（山西票号）が設立され、全国で支店を次々に開店した。その発展から衰退までの時期区別について、若干違いが存在する。黄鑒暉は1823～1853年が設立から初期の発展期、1853～63年が国内の太平天国の乱による挫折期、1863～1893年が清政府との関係の緊密さによる政府機関への送金の大発展期、1893～1911年が最盛期と危機期、1911～1921年が衰退期であるというように細緻に分析した²⁵⁾ 張国輝は1840～1870年を錢莊・票号の初期発展、1860～1900年を錢莊機能の変化と票号の更なる発展、1900～1911年を錢莊の転換と票号の衰弱に分けて論述している²⁶⁾ 若干の差があるものの、1860年代からの発展と、1900年代の衰退が一致していると理解していであろう。附図に表示したように、成立した初期に全国で支店を省都に設立したが、清末になると、そのネットワークが地方都市にまで拡大したと読める。ここで時期について強調したいのは後述するように、1870～1900年間の拡大

25) 同3，目録より。

26) 同4，『晚清錢莊和票号研究』の目録より。

した時期が本稿の重要な論点に関わっているからである。

衰退の要因について、陳玉雄は1980年代以降の研究においては一般的に「封建的性格」による必然の結果だと総括し、そして、「票号」を含んでいる広義的な「錢莊」の衰退原因として、金融としての資金調達における独立の欠如と、「家業」としての「家計」からの未分化による持続性の欠如を指摘した²⁷⁾しかし、黄鑒暉は「清王朝の衰退、滅亡にともない、票号も滅亡した」という通説に対して、為替と貸金という二つの大きな業務から1900～1910年代のデータを利用して、真正面から票号の取引相手は清政府だけではないと反論した。実際、データは限られているが、時期を遡って、票号の役割をもっと明らかにすることができないものかと思われる。

第2節 山西省における銅錢使用状況

1. 山西省の銅錢鑄造について

清代における山西省の制錢鑄造事情²⁸⁾について、『清朝文献通考』、『清実録』、『清朝通典』、『欽定戸部鼓鑄則例』、『清代檔案史料叢編』等を利用して考察してきたが、ここで簡単にまとめてみよう。

順治元(1644)年に山西省と大同鎮にそれぞれ鑄造局の設立が命じられた²⁹⁾その具体的な鑄造した制錢数が分からないが、片断な記録が残された。大同の鑄造局は元(1644)年10月～5(1648)年6月の間、資本金34,240両で制錢を鑄造し、鑄造収益が118,327両あった³⁰⁾6(1649)年に陽和城に移して³¹⁾

27) 同20。陳玉雄は孔祥毅が「清亡、票号亦亡」という通説を援用しつつ、後期の票号の変質や業務システムの不整備に原因があると分析したことを掲示し、李永福(『山西票号研究』、中華工商聯合出版社、2007年)は「政治、軍事事務の衝撃」、「制度要因」、「株主の贅沢な生活」に求めていると要約した。

28) 拙稿「清代における銅錢鑄造量の推計——順治～嘉慶・道光期を中心として——」『松山大学論集』第21巻第3号、2009年。

29) 『清朝文献通考』卷十四、錢幣二、4966頁。

30) 中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』(第七輯)、中華書局、1981年、189頁、11(1654)年1月26日車克の報告。

31) 同29、4967頁。

7 (1650) 年 1～12 月に資本金 2,000 両で鑄造収益が 5,613 両あったが³²⁾ 13 (1656) 年にまた大同鎮に戻ってきた³³⁾。省都太原鑄造局は 5 (1648) 年 1～12 月に鑄造収益が 4,970 両あり³⁴⁾、7 (1650) 年 1～12 月資本金 7,610 両で鑄造収益が 7,307 両あり³⁵⁾、9 (1652) 年 12 月～10 (1653) 年 12 月の鑄造収益が 12,809 両³⁶⁾ あった。18 (1661) 年に山西巡撫白如梅は制錢の鑄造量が省都の軍兵への支給に不足のため、大同鑄造局の炉数を減少して省都の太原局に炉数を増加すると申請し、許可された³⁷⁾。以上の史実から見ると、順治期に他の省と比べると、山西省は最初から中央政府の許可を得て、積極的に制錢を鑄造し、鑄造収益がずっとあった。そして、この地域に省都太原と大同鎮に鑄造局を二局設置することを極めて重視したと窺われる。

康熙期になると、山西省は各省とともに 6 (1667) 年に再開し、太原鑄造局に「原」字、大同鑄造局に「同」字が定められたが、9 (1670) 年に太原鑄造局、10 (1671) 年に大同鑄造局の停止が命じられた³⁸⁾。官撰文献を見る限り、康熙期に鑄造を回復したことはなかった。

雍正 7 (1729) 年に山西省太原府局で「宝晋」二字の制錢を鑄造することが命じられたが³⁹⁾、9 (1731) 年に停止された。1.4 万貫を鑄造したと推計されている⁴⁰⁾。

乾隆期に入ると、山西商人が銅原料の調達を進めて 13 (1748) 年に山西宝晋局が再開され、炉数 10 座を設置して毎年 12 卯「青錢」42,324 串を鑄造す

32) 同 30, 189 頁, 8 (1651) 年 2 月 11 日佟養量の報告。

33) 同 29, 4968 頁。

34) 同 30, 6 (1649) 年 8 月 22 日祝世昌の報告。

35) 同 30, 8 (1651) 年 1 月 6 日劉弘遇の報告。

36) 同 30, 11 (1654) 年 1 月 12 日劉弘遇の報告。

37) 同 29, 4970 頁。

38) 同 29, 4972 頁。

39) 同 29, 4987 頁。拙稿「清代における銅錢鑄造量の推計——順治～嘉慶・道光期を中心として——」に雍正期の山西省太原府局が「原」字にと書いたが、ここで訂正する。

40) 佐伯富「清代雍正朝における通貨問題」東洋史研究会『雍正時代の研究』同朋舎, 1986 年, 681 頁。

ることが許可された⁴¹⁾ 17 (1752) 年に宝晋局を停止し、翌年銅原料を調達することができたので回復したが、炉4座を減らして6座で制銭を铸造することに決定した⁴²⁾ 21 (1756) 年に山西巡撫明德は制銭の铸造額が市場の銭貴を満足できないと報告し、四川省の銅が豊富であるため、毎年四川省から銅を購入することを許可したら、炉5座を増加して11座になり、17,500串の制銭を増額して市場に投入できると提案した⁴³⁾ その案が議定されたが、その後山西省についての記録がない。しかし、唐与昆は道光20年代の山西省の铸造額を17,472貫と推計している⁴⁴⁾

筆者は以上のデータを元にして、記録通りに、仮に実行したことにして、そして山西省の人口を平均して一人当たりの銅銭使用量を推計してみた。すなわち、雍正に8文、乾隆期20年代まで41文、乾隆60年代まで95文、嘉慶16 (1811) 年120文になる⁴⁵⁾ 全国から見れば、制銭使用量が低い地域であったことが分かったが、山西省という地域で銅銭を使用する可能性があると確認した。

2. 銅銭使用状況

以上の铸造事情から分かったように、山西省内において清代の初期から銅銭の供給を始め、铸造額は多くなかったが、持続してきたと考えられる。銅銭が庶民や軍兵の日常生活に用いられてきたと思われるが、その使用状況について見てみたい。

以下は山西票号の送金業務の信稿における銅銭使用に関する事例である。

41) 同29, 5006頁。しかし、『欽定戸部鼓铸则例』に毎年12卯铸造額26,208串と記録している。

42) 同29, 5009頁。しかし、『清朝通典』(全一冊(浙江古籍出版社, 1986年)に17(1752)年に宝晋局炉7座を停止すると記録している。

43) 同29, 5011頁。

44) 唐与昆『制銭通考』巻3, 18~23頁, 杜家驥「清中期以前の铸銭量問題——兼析所謂清代“銭荒”現象」(『史学集刊』1991年第1期)から引用, ただ, 唐与昆は以前の統計を使用したのではないかと思われる。

45) 同28, 表3-3を参照。

例

(道光二十四年四月初五蔚泰厚京都分号致苏州分号第八次信)

前略 再有会来程子廉之銀，伊信内所注，原系会钱，并非会銀，伊言信面批注会銀不符，亦不足为据，要按信内注写，仍收九八大钱一百五十千文。咱号与伊多年交好，亦不必细为交论耳。今交伊九八大钱一百五十千文，封去换钱清单一纸，按南北钱单核算，咱号赔銀四两六钱八分，其京苏过账，仍按原会曹平足銀九十两过账报之。
 出典：『山西票号史料』29頁。

訳文

前略 また、程子廉から送ってきた銀は手紙に注を付けたように、元々銅錢を送金したいので、銀ではない。手紙に記録したように銀の送金と違ったので、そして根拠にならないため、注を付けたように、九八大錢一百五十千文を預かる。わが店と多年に渡りいい関係になっているので、もう細かいことを考えなくてもいい。今、九八大錢一百五十千文という明細書を送り、南方と北方の銅錢を計算すると、わが店は銀四兩六錢八分の損になる。京師と蘇州間の帳簿を転記する際、また元々送金した曹平足銀九十兩通りに転記する。

この例からみれば、業務上で店として損を抱えていたにもかかわらず、いままでの顧客とのいい関係を考量してその要望通りに銅錢で取引したことが分かった。そして、北方の京師（北京）と南方の蘇州の間に、銅錢を使用した際に、銀兩との比価よりその差があるだけではなく現地の曹平兩で決済すると、その損害も生じたと考えられる。山西票号の取引上において銀兩の送金が基本であるが、例のような銅錢の扱ひもあったといえるであろう。

山西省地域において銅錢使用の事例として、嘉慶期の訴訟案件に、貸付の場合、39件の中に制錢使用が28件、銀兩使用が11件であった⁴⁶⁾ことが分かった。

「査民間置买房地，糶糶米粟，貿易貨物，用銀之処少，用錢之処多。」⁴⁷⁾

調べたところ、民間では家屋敷や土地を購買する時に、米穀を仕入れる時

46) 李文治編『中国近代農業史史料』（第一輯 1840～1911）中国科学院經濟研究所『中国近代經濟史參考資料叢刊』（第三種），生活・読書・新知，三聯書店，1957年，91頁。

47) 同 16，128頁。

に、貿易の時に、銀を用いることは少なく、銅銭を用いることが多い。

この報告は道光18(1838)年の内容であるが、当時、銀両より銅銭の使用が多かったことがうかがわれる。王業鍵も19世紀前期の貨幣使用について、北方にはほぼ銅銭と錢票で行使したと認識している⁴⁸⁾

山西省における銅銭使用の例が若干あるとしか言えないが、北方の重要な商業地域として活躍した山西票号以外に、錢莊も重要な役割を果たしたと言えよう。孔祥毅⁴⁹⁾は山西省の錢莊を重視し、金融史での意義を検討しているが、簡単にまとめてみる。票号の資本金が8~20万両であったことに対して、錢莊の資本が500~50,000両であった。票号の取引相手は大商人、官僚と政府であり、業務の金額が高額で500両以下の取引をしなかった。錢莊の場合は中小規模の商人、生産者を取引相手としていた。錢莊は票号のように山西省以外の地域に支店を設立していなかったが、出資、経営した場合があった。全国でどのぐらいの錢莊を開設したかについての推計がまだないが、北京、天津、張家口、歸化、包頭、河南、漢口の商業地域に山西商人の勢力が強かったと言われている。民国4(1915)年の『綏遠通志稿』に京師(北京)に「山西祥字号」という錢莊グループが40軒あると記録している。そして、錢莊の軒数が増加したことにもない、同業行会組織も生まれて、歸化という地域に「宝豊社」と呼ばれた組織が設立された。それぞれの錢莊は順番にリーダーになり、資金調達に協力しながら工夫をしてきた。銀両と銅銭以外に、「凭帖」等と呼ばれる錢票がよく用いられた。

「晋省行用钱票，有凭帖，兑帖，上帖名目。凭帖系本铺所出之票；兑帖系此铺兑与彼铺；上帖有当铺上给钱铺者，有钱铺上给当铺者。此三项均系票到付钱，与现钱无异。」⁵⁰⁾

信用貨幣において、6種類があった。「凭帖」と呼ばれたものは本店から発

48) 王業鍵「中国近代貨幣興銀行的演進」『清代經濟史論文集』稲郷出版社、2003年、57~8頁。

49) 孔祥毅「山西錢莊在中国金融史上的地位不可忽視」154~7頁(『金融票号史論』)。

50) 同16、130頁。

行したものであり、随時現金と交換できるものである。「兌帖」は本店から発行したものであるが、別の店で制銭、銀両で受け取られるものである。「上帖」は銭荘の間や銭荘と質屋の間に契約したものである。「上票」は銭荘以外の商店から発行したものであり、信用性がややうすかったが、銭荘でも使用できるものである。「壺瓶帖」と呼ばれたものは年末の資金不足の時期に一般商店や銭荘が発行したものであり、随時に現金と交換できないものである。「期帖」と呼ばれたものは現在の先物の手形に似ているものである。以上の6種の銭票は道光年間に普及し、「凭帖」,「兌帖」,「上帖」はある種の手形として現金と同じように使用されたが、「上票」,「壺瓶帖」,「期帖」は随時に現金と交換できないため、揉めることが度々発生した。

「查嘉庆八、九年（1803～1804）间、每银一两易钱八、九百文、彼时钱票已流行」⁵¹⁾

調べたところ、嘉慶8、9（1803～1804）年間、銀1両を銅銭800、900文に交換し、その時に銭票も流行していた。

戴建兵は銭票について県ごとに詳細に掲載しているが、資料の限界で主に民国から発行した統計である。山西省の道光年間（1821～50年）から咸豊（1851～61年）初年までの発行状況について明らかになっていないが、平遥で道光26（1846）年に魁盛昌が額1,000文、咸豊11（1861）年に豊裕慶が額1,000文、同治7（1868）年に源聚号が額1,000文と4,000文、光緒元（1875）年に蔚長永が額1,000文という銭票を発行してその現物が現在まで残されている⁵²⁾。

以上の分析からみると、山西省は政府の許可により制銭の鑄造がずっと行われてきたが、その鑄造額が僅かであったため、市場で流通する需要量を満足できない状態であった。庶民の間に銅銭使用の習慣があったものの、銭荘と一般商店が発行した銭票で銅銭の不足分を補填し、銅銭使用の不便を解消したと思

51) 同16。

52) 戴建兵『中国銭票』中華書局、2001年、111頁。

われる。無論、不良心な商人が発行した銭票と不兌換することも度々発生し、その損害を小規模の商人や庶民や農民が背負うことになった。民間社会で行使されてきた銭票は元代に発行した紙幣「宝鈔」のように、庶民の間で頻繁に用いるものであろうか。道光年間の銭票は信用紙幣としてあくまである種の約束手形であったと理解しているが、銭票を発行する側と銅銭・銀両を預かる側の間に用いられるものであろうと考えられる。当時、銭票がどのように一般庶民の間にスムーズに受容されたかについては明らかになっているとはいえないであろう。

第3節 貨幣流通の視点から山西票号の役割

孔祥毅、黄鑒暉の研究に山西票号の経済数量データを援用しつつ検討してきたが、近年『山西票号史料』の統計による研究が注目されている。本節で劉建生が統計した山西票号の業務総量と燕紅忠が計算した票号の総資力と収益総量を利用しながら、山西票号の為替（手形）送金業務に関わった貨幣の流通量が清代中後期の全体経済力に対してどのぐらいの規模であるかを仮説として提起したい。

16世紀中葉から大量の銀が日本と新大陸から中国に流入してきて、1840年以降から銀が新たに中国から海外に流出したと言われている。研究者たちは様々の角度から議論を行っている。清代社会における銀両と銅銭による貨幣の流通量について既に試論として考察してきたが⁵³⁾ まだ課題が残されている。即ち、銀両、銅銭、外国貨幣以外に、19世紀初期から紙幣も民間社会で使用していたのである⁵⁴⁾ 発行した紙幣の額⁵⁵⁾ については明確になっているとは言

53) 岩橋勝・李紅梅「近世日本中国朝鮮における貨幣経済化比較史試論」（大阪経済大学日本経済史研究所編『東アジア経済史研究 第一集～中国・韓国・日本・琉球の交流～』、2010年）に16～17世紀から18世紀末流入してきた外国銀が1トンと推計され、2億7千万両に相当する。仮説として、18世紀に銀1両＝銅銭1,000文の公定比価通りにできれば、2億7千万貫に相当する。理想論として、銀両の量と合わせる銅銭を鑄造すれば、市場で流通した貨幣量も安定できる。実際、制銭の供給を調整していたが、銀両と同じ2億7千万貫鑄造額の制銭を鑄造していないであろう。

えないが、清政府の咸豊期における大清宝鈔の発行量より、それまでに民間金融機関で発行した紙幣額は極めて大きかったと言えるであろう。しかし、貨幣の流通総量を見込む研究がまだ表れていない。ここで考える角度を変えて、市場で流通していた商品の価値で計算することができないだろうかと考えている。国内市場商品取引量についての研究はまず呉承明の推計であろうと思われる。この推計は若干低めにしたと本人も認めているが、よく研究者に引用されている。附表4は、1840年、1869年、1894年、1908年、1920年に主に流通した品目の商品取引量と輸出品も入れた全商品の取引量の推計である。市場商品取引量について地域間の移動を加算する可能性があるが、呉承明は最初の推計から地方の小規模市場での生産者間の交換や市場に入ってから商人間の取引、消費者への小売価格を含まず、輸出品の価格も内陸へ転売する価格ではなく、港の到着価格で推計すると解釈している。そうすると、市場に流通した商品取引量に対して、その代価の貨幣で支払うという単純な式になる。それであれば、国内の商品取引量の価値は市場が需要した貨幣流通量として理解しているであろう。時期として、若干のずれがあるが、下表のように合わせてみた。前述したように、19世紀50年代の太平天国の乱の時期が票号の再発展時期で、19世紀の70～80年代が票号の急速な成長期でありながら、清政府との癒

表 票号の総資力と国内商品量との推計

時 期	総 資 力			国内の 商品取引量 (億両)	占め率
	(万両)	公金総額 (万両)	%		
19世紀50年代	5,368			5.25	10.20%
19世紀70-80年代	23,663	5,916 (1862-1889年)	25.00	9.28	25.50%
1900年代	76,741	5,464 (1890-1900年)	7.12	12.67	60.57%
1910年代	76,741	10,947 (1901-1911年)	14.26	21.99	34.90%

出典：附表1と4より整理。

54) 同48、王業鍵は紙幣の役割を重視している。

55) 同18、しかし、貨幣流通総量についての推計がまだない。

着の時期で、1900～1910年代が票号の頂点の時期であった。その時期に合わせて票号の特徴を考えて見たい。ちなみに、国内の商品取引量は上海規元で計算されたが、票号の総資力は両で示された。票号の総資力の単位基準が明確になっていないため、この点を省略することにする。

19世紀50年代に票号の総資力は5,368万両で、国内商量の10.2%を占めていた。その間に、政府との関係があったが、公金送金のデータは明確になっていない。19世紀70～80年代に総資力は2.37億両に拡大して、その期間に国内商品取引量の4分の1を占めるようになった。その時に呉承明が推計した輸入商品取引量は7,500万両で、国内商品取引量の8.7%を占めていた（附表4）。票号送金業務の中で政府関係の公金が25%を占めていたことが分かった。1900年代までに推計すると、票号の業務をさらに拡大し、総資力が7.67億両になり、国内商品取引量の6割に上った。つまり、票号のネットワークで清代経済の半分以上に関わったことになる。その中で政府の公金送金占め率が7.12%に減少した。燕紅忠、劉建生の推算は1911年までなので、同じ数字で1910年代まで見通したい。すなわち、1910年代になると、票号の総資力は国内商品取引量の3割余りになるが、政府公金の送金業務が総資力の14.26%になる。まとめてみると、票号の発展が政府との関わりで拡大しつつあるが、少なくとも全体の4分の1以内に留まっていたといえるであろう。即ち、政府関係以外に山西商人が全国及び海外で票号を開設したことによって、経済発展を円滑に果たした役割が大きかった。山西商人ネットワークの力が最も大きかったと言えるであろう。そして、貨幣流通市場において、銀両など金属貨幣から信用貨幣の最初の段階へ進んでいたといえるであろう。

ま と め

以上、貨幣流通の視点から山西省における貨幣の鑄造・使用事情と票号の役割を検討してきた。1823年に創業した票号は銀両の為替送金によって国内長距離の現銀運送を解消し、中国式の最初の通商銀行としての役割を果たした。

その送金業務によって票号自体の資産も拡大した一方、銀両の決済や送金を円滑化することが可能になった。第3節で提起した仮説はいささか大胆なものではあるが、山西票号の全体像を国内商品流通の大きな枠においてみたら、その役割が明瞭になってくる。すなわち、少なくとも1870年代から1910年代までの30年間に山西票号が扱った銀両の総量が全国商品取引量の2割から半分以上に拡大したと推計できる。

票号の衰退が20世紀30年代から始まるとよく議論されてきているが、山西省の研究者の見解に大枠賛同しながらも、本稿でよりもっと詳しく分析することができた。つまり、1870～1880年までは公金に占める率が多かったものの、1900年には減少したことが分かった。そして、公金の送金が多かった時期に票号は国内流通商品量に対して2割程度であったが、1900年までに総資力の7%が公金の送金を占めた。公金の送金額は変わらないが、票号の支店を増加することにより、民間市場の送金業務を拡大し、票号全体の規模が巨大化したと言えるであろう。1840年のアヘン戦争以降、周知の如く戦争の賠償金の負担がずっとあったが、清政府は増税と外国からの借金で1911年まで維持してきた。外債史の資料からみれば、外国の銀行からの借金が多かった。即ち、票号はそのような送金業務を扱ってはいなくて、公金以外の商人間の決済業務を中心としてきたと考えられる。1900年と1910年のデータ合わせが若干曖昧であるが、清政府の衰亡に伴って一気に衰退したと言うより、巨大化した票号の内部事情と1911年以降の市場の流れに適応できたかどうかという点に原因があると思われる。

山西省において、銅銭使用が清代初期から行使されたと考えられるが、市場の不足分が銭票などの紙幣で補充されていた。そして、銭票が民間社会で広範に受容され、行使されていた点に注目して、再検討する必要があると思われる。すなわち、銭票を銭荘や一般商店の間で約束手形として使用したか、銭票を発行する側と銅銭・銀両を預かる側の間で小切手のように使用したか、保存されていた平遥の1,000文や4,000文の銭票のように銭荘から発行してすぐ民

間で使用し始めたか、それとも以上の三つの方式で同時並行的に行使したかという点を明らかにする課題が残されている。

ちなみに、山西票号の送金業務の際、必ずしも銀両での決済ではなく、顧客の要望で銀両か銅銭かが決められた点について注目しておきたい。

附表1 山西票号の数量、業務、資本と利潤総量

時 期	本店 総数	支店 総数	手形 発行量	預金 総額	貸付 総額	総資本	純収益	総資力
19世紀50年代	15	150	4,662	640	775	66	46	5,368
19世紀70-80年代	28	446	11,881	11,396	4,859	386	126	23,663
1900-1911年間	26	500	58,566	17,350	12,842	525	213	76,741
1913年	20	320	—	3,617	4,542	—	赤字	—

出典：劉建生「山西票号業務総量之估計」；燕紅忠「山西票号資本与利潤総量之估計」。

附表2 年度別に票号から送金した公金額（単位：両）

年度	金 額	年度	金 額	年度	金 額
1862	100,000	1879	2,097,660	1896	5,452,226
1863	1,390,985	1880	4,796,239	1897	436,500
1864	561,567	1881	3,345,307	1898	2,939,260
1865	1,437,730	1882	1,958,610	1899	10,731,558
1866	2,386,369	1883	3,237,754	1900	3,646,460
1867	4,522,791	1884	295,034	1901	4,897,320
1868	—	1885	3,258,880	1902	10,243,554
1869	2,905,668	1886	4,092,273	1903	11,035,298
1870	500,979	1887	179,119	1904	4,404,349
1871	165,000	1888	175,684	1905	20,390,180
1872	3,017,999	1889	3,489,988	1906	22,576,499
1873	1,790,744	1890	6,439,863	1907	13,674,660
1874	100,000	1891	5,334,217	1908	10,302,087
1875	5,521,631	1892	5,217,970	1909	652,352
1876	4,906,767	1893	5,253,592	1910	5,957,491
1877	2,905,765	1894	1,660,546	1911	5,337,939
1878	21,335	1895	7,526,196	総額	223,271,995

出典：中国人民銀行山西省分行、山西財経学院〔編〕『山西票号史料』1990年、130-32頁、242-249頁より。

附表3 1910年票号は京師に発行した銀票の統計

票号名称	銀錠数 (両)	準備金 (両)
蔚泰厚	148,922	80,000
大徳通	239,830	140,000
大徳恒	79,800	40,000
協同慶	45,378	25,000
蔚長厚	51,798	26,000
蔚盛長	82,000	41,000
蔚豊厚	55,380	40,000
日昇昌	127,431	65,000
百川通	42,350	25,000
合盛元	14,500	8,000
志一堂	37,458	20,000
存義公	120,400	60,200
宝豊隆	14,569	9,000
天成亨	40,334	25,000
新泰厚	46,786	25,000
大盛川	12,550	6,000
三晋源	28,000	15,000
協成乾	21,300	10,000
錦生潤	8,530	5,000
大徳玉	39,600	19,800
義成謙	10,000	5,000
大盛川	8,200	4,000
世義信	12,000	6,000
天順祥	52,000	26,000
義善源	95,272	48,511
	銀元票 21,270元	11,060元
裕源	5,000	2,500
	銀元票 10,000元	5,000元
26軒 合計	銀両票 148,438,781両	銀両票 799,511両
	銀元票 31,270元	銀元票 16,060元

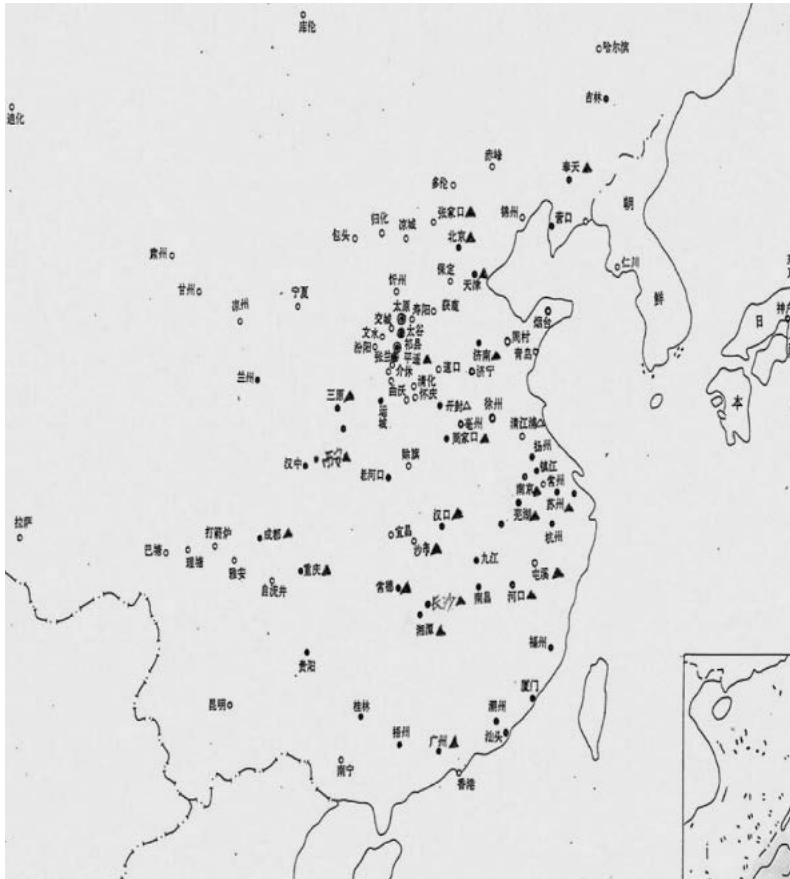
出典：劉建生「山西票号業務総量之估計」より。

附表4 国内市場商品量推計 (単位：上海規元 億両)

	1840年	1869年	1894年	1908年	1920年
国内生産商品	5.25	8.53	10.86	17.6	64.05
輸入商品商品価値		0.75	1.81	4.39	8.49
全商品の商品価値	5.25	9.28	12.67	21.99	72.54

出典：呉承明「近代中国国内市場商品量の估計」表6より。

附图 清代末期に山西票号の分布図



出典：中国人民銀行山西省分行・山西財經学院 [編]『山西票号史料』(山西經濟出版社, 1990年)より加筆した。▲を付けている地名：道光時期に票号の分布図。

参 考 文 献

(史料集)

1. 中国人民銀行山西省分行・山西財經學院編『山西票号史料』山西經濟出版社，1990年。
2. 中国人民銀行山西省分行・山西財經學院《山西票号史料》編写組，黃鑿暉編『山西票号史料』山西經濟出版社，2002年。
3. 濱下武志・李焯然・林正子・張士陽編『山西票号資料 書簡篇（一）（東洋学文献センター叢刊第60輯）』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会，1990年。
4. 『清朝通典』（全一冊）浙江古籍出版社，1986年。
5. 『皇朝文献通考（一）』、『皇朝続文献通考（一）』浙江古籍出版社，2000年。
6. 故宮博物館院編『欽定戸部鼓鑄則例』（影印本）海南出版社，2000年。

(二次文献)

[中文]

1. 陳其田『山西票莊考略』商務印書館，1937年。
2. 戴建兵『中国錢票』中華書局，2001年。
3. 杜家驥「清中期以前的鑄錢量問題——兼析所謂清代“錢荒”現象」『史学集刊』1991年第1期。
4. 黃鑿暉「清代帳局初探」『歷史研究』1987年第4期。
『山西票号史』（2002年第一版）山西經濟出版社，2008年。
5. 孔祥毅『金融票号史論』中国金融出版社，2003年。
6. 孔祥毅・王森主編『山西票号研究』中国財政經濟出版社，2002年。
7. 李文治編『中国近代農業史史料』（第一輯1840～1911）中国科学院經濟研究所『中国近代經濟史參考資料叢刊』（第三種），生活・讀書・新知，三聯書店，1957年。
8. 林滿紅「世界經濟与近代中国農業——清人汪輝祖一段乾隆糧價記述之解析」中央研究院近代史研究所編『近代中国農村經濟史論文集』1989年。
9. 劉秋根「15～18世紀中国資金市場發育水平蠡測」『人文雜誌』2008年第1期。
10. 劉建生「山西票号業務總量之估計」『山西大学学报（哲学社会科学版）』第30卷第3期，2007年。
11. 吳承明「近代中国国内市場商品量的估計」『中国的現代化：市場与社会』生活・讀書・新知，三聯書店，2001年。
12. 王業鍵「中国近代貨幣興銀行的演進」『清代經濟史論文集』稻鄉出版社，2003年。
13. 衛聚賢『山西票号』（初版1936年）經濟管理出版社，2008年。
14. 燕紅忠「山西票号資本与利潤總量之估計」『山西大学学报（哲学社会科学版）』第30卷第6期，2007年。
15. 葉世昌「從錢舖到錢莊的產生」『学述月刊』1990年05期。
16. 張国輝「清代前期的錢莊和票号」『中国經濟史研究』1987年第4期。
『晚清錢莊和票号研究』中華書局，1989年。

17. 張正明・鄧泉『平遥票号商』山西教育出版社, 1997年。
 18. 張惠信「清末貨幣變革對山西票號的影響」『財政與近代歷史論文集』中央研究院近代研究所, 1999年。
 19. 中国人民銀行總行參事室金融史料組編『中国近代貨幣史資料』(第一輯)中華書局, 1964年。
 20. 中国第一歴史档案館編『清代档案史料叢編』(第七輯)中華書局, 1981年。
- [日文]
1. 加藤繁『支那經濟史考証』東洋文庫, 1953年。
 2. 香山峻一郎『錢莊資本論』実業之日本社, 1948年。
 3. 木村亜子「清代咸豊期における山西票号について」奈良女子大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』19, 2003年。
 4. 佐伯富「清朝の興起と山西商人」『社会文化史学』(第一輯), 社会文化史学会, 1966年。
「清代雍正朝における通貨問題」東洋史研究会『雍正時代の研究』同朋舎, 1986年。
 5. 鈴木総一郎『支那における金融の特殊性』千倉書房, 1941年。
 6. 蕭文嫻「清末上海金融市場の形成における伝統金融機関山西票号の役割」『經濟史研究』(9), 2005年。
 7. 中村哲夫「近代中国の通貨体制の改革——中国通商銀行の創業——」社会經濟史学会『社会經濟史学』62巻3号, 1996年。
 8. 陳捷「山西商人と票莊について」新潟大学『現代社会文化研究』1, 1994年。
 9. 陳玉雄「「錢莊」の發展と衰退——「中国式銀行」の衰退要因に関する試論——」『中国のインフォーマル金融と市場化』麗澤大学出版会, 2010年。
 10. 西山栄久「山西の為替業者たる票号の起原とその変遷」『東亜經濟研究』(十一〜一)1927年。
 11. ロイド・E. イーストマン著, 上田信・深尾葉子訳『中国の社会』平凡社, 1994年。
 12. 岩橋勝・李紅梅「近世日本中国朝鮮における貨幣經濟化比較史試論」大阪經濟大学日本經濟史研究所編『東アジア經濟史研究 第一集〜中国・韓国・日本・琉球の交流〜』2010年。
 13. 李紅梅「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として——」『松山大学論集』第18巻第3号, 2006年8月。
「清代における銅錢鑄造量の推計——順治〜嘉慶・道光期を中心として——」『松山大学論集』第21巻第3号, 2009年。
「清代中期四川巴県における貨幣流通——『巴県档案』を史料として——」『松山大学論集』第22巻第4号, 2010年。
「清代安徽省における貨幣流通——徽州文書を中心として——」『松山大学論集』第23巻第2号, 2011年。